

鏡(三角縁神獣鏡など)

鏡は、自然環境に宿る神を崇拝する日本固有の宗教・神道の重要な象徴です。日本神話では、太陽神・天照大神が隠れていた洞穴から彼女を外に出すために使われ、世界に光を取り戻しました。今日、神社に行くと、祭壇の上に銅鏡が置かれているのを見ることがでしょう。

剣やコンマの形をした数珠玉(「宝石」と表現されることも多い勾玉)とともに 4 世紀の銅鏡が沖ノ島の最古の祭場で多数発見されました。日本最古の歴史書に記録されている創造神話によると、太陽神・天照大神は孫息子・瓊瓊杵尊を地上に遣わした際、これらの三種の神器を彼に授けました。彼は皇室の始祖となり、三種の神器(鏡・勾玉・剣)は皇室の神性の象徴として崇められています。

鏡は中国起源のものと考えられており、後に日本で同様の様式で作られたものもあります。最も有名で保存状態のよい例は三角縁神獣鏡で、聖なる獣に囲まれた中国神話の二神の西王母と東王父など漢(紀元前 206 年-紀元 220 年)時代に流行したデザインが描かれています。